

Japa Newsletter (毎月1日発行)



掲載写真募集中

INDEX

1. コラム：2026年グローバルリスク報告から読み取れること
2. 寄稿：流鏑馬との偶然の出会い (公益社団法人大日本弓馬会 副会長 奥山幸猛)
3. 解説：社会的孤立・孤独の理解
4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独・社会システム
5. 読者の声：第二の人生 生涯現役で行く その9 (作詞・作曲家 高橋育郎)
6. 連携団体及び Japa からのご案内
7. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月1日発行の会員及び関係者向けの newsletter です。
1ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ Japa からのお願い ◆◆

社会課題解決型のハイブリッド（人間 with AI）システムの企画・開発を検討中です。
レベニューシェアで共創いただける AI エンジニア（フリーエンジニア、副業等）の方
で、ご関心のある方は、Japa 事務局までご連絡ください。

1. コラム：2026年グローバルリスク報告から読み取れること

(Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典)

2025年末から2026年初頭にかけて、世界経済フォーラム、ユーラシア・グループ、PHP総研、ブラックロックなど、主要機関によるグローバルリスク報告が相次いで公表された。それらを横断的に読むと、共通して浮かび上がるのは、世界がもはや「協調と安定」を前提に動く段階を越えたという現実であり、「リスクが増えた」のではなく、「リスクの性質が変わった」という事実である。2026年は「競争と多極化の時代」へと世界が明確に舵を切った転換点となりそうである。すでに、米国のドンロー主義の実践がリスクを顕在化・事実化させつつある。

グローバルリスクの報告を総合すると、2026年のリスク像は三層構造で理解できる。第一は、地経学的対立と米国政治の不安定化である。関税、制裁、資源、技術が安全保障の道具となり、経済秩序そのものが政治化している。第二は、AIや量子技術といった技術の急伸と、それに制度・規制・インフラが追いついていないという問題である。第三は、環境、社会保障、インフラといった長期基盤リスクが、短期ショックへの対応に押されて軽視されている点である。これら三層は相互に関連し、危機が起きた際の影響を何倍にも増幅させる構造を形成している。

とりわけ日本にとって重大なのが、「トランプ 2.0」下の米国政治である。ユーラシア・グループが「米国の政治革命」と呼ぶように、同盟や国際制度はもはや自明の前提ではない。そして、「アメリカにはしごを外される」リスクは、扇情的な比喻ではなく、政策立案において現実的に織り込むべき前提条件になりつつある。同盟は依然として重要であるが、「同盟＝自動的な保険」という暗黙の理解は、2026年以降、確実に弱まっていく。世界は「世界の警察官」がいない「秩序の空白」を奪い合う「対立と取引に基づく力の政治」へとシフトしつつある。

テクノロジー分野でも、同様の時間差が顕在化している。AIや量子技術は生産性と利便性を飛躍的に高める一方で、雇用構造の急変、格差拡大、重要インフラの脆弱化を招来する。イーロン・マスクの「2026年はシンギュラリティの年」という発言が象徴するのは、技術の到達点そのものではなく、社会や制度が変化の速度についていけないという不安である。ここでも本質は、技術の善悪ではなく、ガバナンスの遅れとそれを是正する意思決定の遅さにある。

日本はこのリスク環境にどう向き合うべきか。必要なのは、対米依存の再定義、経済安全保障とサプライチェーンの再設計、テクノロジーとインフラへのレジリエンス投資、そして社会・経済・環境を貫く長期戦略を、一つのストーリーとして束ねることである。重要なのは、これらを「危機対応策」と「成長戦略」に分けて考えないことである。リスクへの備えは、将来の選択肢を減らすためではなく、むしろ増やすための投資である。2026年は、リスクを嘆く年ではない。どのリスクを前提とし、どこに資源を配分するかを冷徹に選び取る年である。その選択の積み重ねこそが、日本が「停滞の40年」から脱し、新たな「転換・発展の40年」に踏み出せるか、決定的な分水嶺となる。現実的なリスク選択・マネジメントが求められている。

補：本コラムの参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column> に掲載

2. 寄稿：流鏑馬との偶然の出会い（公益社団法人大日本弓馬会 副会長 奥山幸猛）

私は八丈島の牧場主の倅として生まれ、後継ぎとなる兄がいたこともあり、気ままな生活をしていました。高校生のとき、オートバイで高校に通っていたのだが、それを兄に取られてしまい、仕方なく馬で通学していたことがある。

都内の大学、海外の大学で学んだあと、国際機関で仕事をするようになった。中南米やヨーロッパに駐在、多くの人との縁に恵まれ、充実した海外生活であったと思う。

その後、国内の企業に招かれ、しばらく働いた後に独立、現在住んでいる鎌倉に引っ越して来たのは平成 18 年。その折、飼っていた犬の具合が悪くなり、慌てて近所の獣医の元に駆け込んだことがあった。

その獣医が非常に個性的で、どうやら獣医として従軍していたらしく、気骨がありながら、おおらかな人物であった。犬そっちのけで世間話となり、獣医から「俺の団体を手伝ってこないか」と頼まれた。当然「どのような団体か」と尋ねたところ、「流鏑馬の団体」だという。私は流鏑馬が何であるか全く知らなかったことから、獣医から様々な話を聞き、「なるほど、これは凄いものだ」と思ったのが運の尽き。ここから私の流鏑馬との深い縁が始まるのである。

この「流鏑馬の団体“大日本弓馬会”」は鎌倉時代より伝承された日本弓馬術の普及発展を目的として昭和 14 年に鎌倉に設立され、平成 24 年 4 月には内閣府から公益社団法人として認定されている。大日本弓馬会の設立前から既に鎌倉を拠点に活動しており、昭和 6 年 8 月 21 日には、鎌倉大塔宮（鎌倉宮）で流鏑馬神事を奉納し、その後、昭和 7 年 11 月 3 日には、明治節奉祝明治神宮流鏑馬神事を奉納している。この 11 月 3 日の「明治神宮流鏑馬神事」は現在まで続いている。

単に「具合の悪い犬を連れて来ただけの私」を流鏑馬の世界に誘った獣医こそ、800 年も続く流鏑馬の流派「武田流」の司家にして、かの黒澤明監督を唸らせた日本弓馬術の達人、金子四郎家教先生である。しかし、先生は 3 年後には他界され、本来、事務方に専念するはずだった私が、大日本弓馬会の副会長兼事務局長として、運営そのものにも深く関与することになってしまった。



全速力で走る馬上で両手を放して弓矢の的を射るなど、常人にできるものではない。しかも、武田流の射手の中でも一部の凄腕の者は、馬上で上半身が全くブレない、実に美しい乗り方をするのである。この伝統文化「流鏑馬」に黒澤明監督が惚れ込み、黒澤明監督の映画に金子家教先生が出演することになったのも頷ける。

日本に古くから伝わる馬術の技は中途半端なものではない。私は、この世界に誇れる「鎌倉の伝統文化 流鏝馬」を日本国内は当然として、海外にも幅広く紹介し、積極的に外国要人を招いたり、諸外国の関係機関に働きかけるなどして、多くのご縁を結び、そのご縁を大事にしてきた。その結果「YABUSAME」は国際語として使われるようになった。このように、私がより優先的に海外での流鏝馬の評価を高めることに努力したのは、海外で高く評価され、日本人がその価値に気付かされることがしばしばあるからである。



こうした努力の甲斐もあり、2021年には、東京オリパラ大会の安全と成功を祈願する流鏝馬を、文化庁と日本芸術文化振興会の共同主催、オリパラ組織委員会との共催として、明治神宮で執り行うことができた。このオリパラ大会記念コインの第一弾の金貨は「流鏝馬」の図柄であり、このモデルは大日本弓馬会の射手である。

加えて、2025年には、大阪・関西万博の安全と成功を祈願する流鏝馬と笠懸を大阪・関西万博の屋外催事場EXPOアリーナ「Matsuri」において神事とし執り行うに至った。こちらも文化庁と独立行政法人日本芸術文化振興会との共同主催によるものである。

流鏝馬の起源は、第29代欽明天皇が、世が乱れたのを憂い、天下泰平、五穀豊穡、万民息災を祈念して馬上からの的を射させたことにあるという。この流鏝馬の起源や文化的背景からすると、オリパラ大会や大阪・関西万博のような国家的大事業に先立ち、その安全と成功を祈願して流鏝馬を行ったことは、まさに「あるべき姿」であろう。これを実現することができ、感無量である。

流鏝馬の技は高難度であるため、猛稽古が欠かせない。そのためには、十分な稽古を積むことができる「稽古馬場」が必要である。武家の古都鎌倉に「鎌倉の伝統文化 流鏝馬」の稽古ができる環境を整備することは極めて重要であり、鎌倉における流鏝馬の練習場「鎌倉教場」の整備に向け、老体に鞭打って邁進しているところである。「鎌倉の伝統文化 流鏝馬」に貢献できることの幸せを噛みしめている。



補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説：社会的孤立・孤独の理解

(Japa 日本専門家活動協会 芝原靖典)

【社会的孤立・孤独の認識度】

昨年末（2025/12/12）、「孤独・孤立対策に関する世論調査（速報）<https://survey.gov-online.go.jp/202512/hutai/r07/r07-kodoku/gairyaku.pdf>」が発表された。これによると、「孤独を感じる」人が50.4% いるにも関わらず、政府が推進している対策を「知っている」人はわずかに14.2%に過ぎない。

【社会的孤立・孤独に関係する概念・事象】

社会的孤立・孤独の具体的な事象としての現れ方あるいは関係する概念・事象として、総括的に整理したのが「図表 社会的孤立・孤独に関係する概念・事象」である。行政の窓口現場ではこれらが渾然一体となって現れる。「社会的孤立・孤独」はそうした「状態」を表す最上位概念である。

「つながり」は目的ではなく、困りごとが発生・深刻化しないための土台であり、関係事象の対処の鍵となる概念といえる。医療・福祉・支援は、「つながり」があって初めて届く。

図表 社会的孤立・孤独に関係する概念・事象

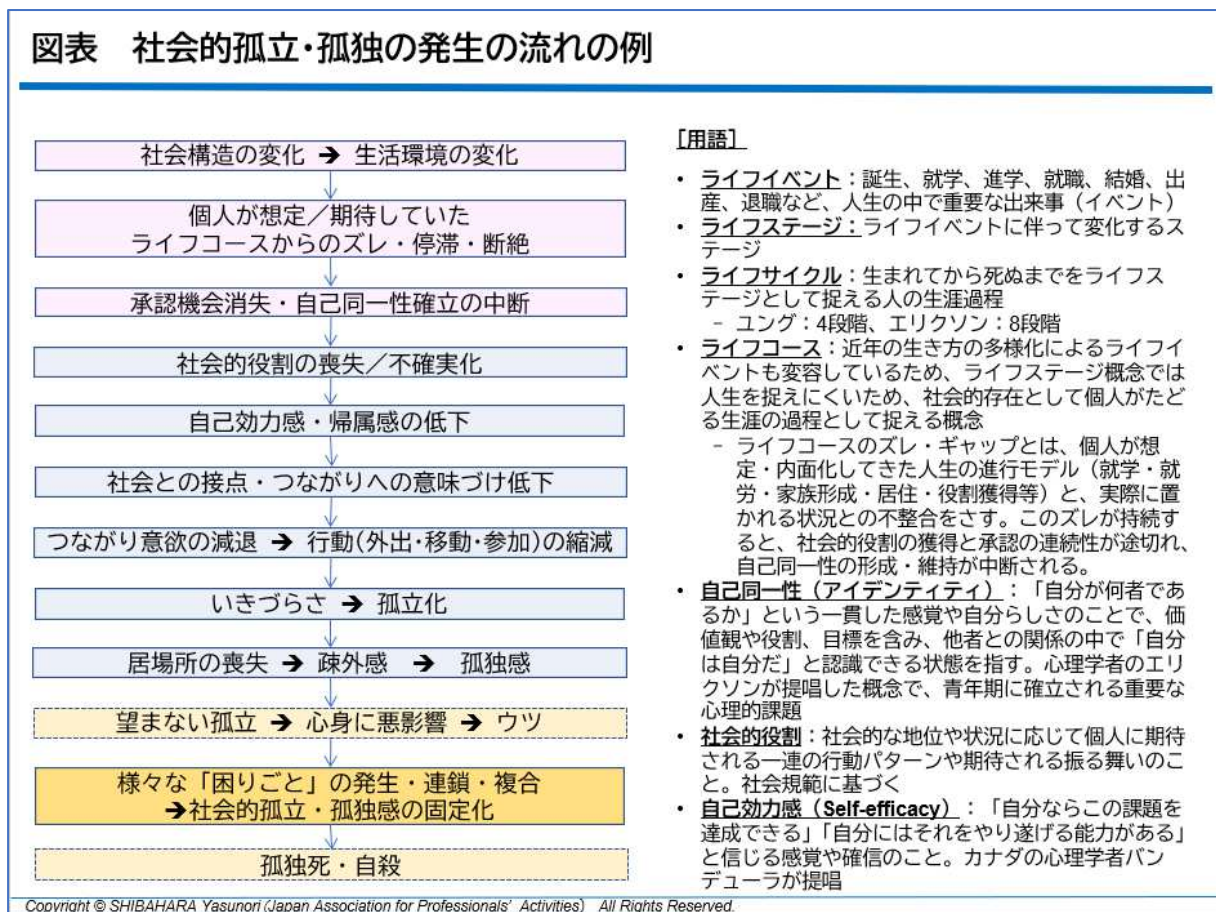
	概念・事象	概要及び社会的孤立・孤独との関係
①	ひきこもり	就学・就労や社会参加の場から長期間離れ、家庭内を主な生活空間とする状態。社会との接点が徐々に失われた結果として生じる孤立の一形態。他の事象と重なりやすい。
②	生きづらさ	社会のルールや期待（社会規範）と、自分が合わない感覚。「どこにも居場所がない」と感じる状態。孤立の入り口になりやすい。
③	8050問題	高齢の親と中高年の子が、家庭の中だけで問題を抱え続ける状態。親も子も地域や制度から切れやすい。孤立が家族単位で固定化した姿である。
④	困窮	お金が足りないだけでなく、仕事・住まい・人間関係を同時に失いやすい。恥や不安から、さらに孤立が深まる。
⑤	介護・ケアラー	支援される側ではなく「支える側」の孤立。時間拘束・心理的負担により社会接点が消失する。表面化しにくく、制度の谷間に落ちやすい。
⑥	障がい	本人の特性そのものより、社会や環境が合っていないことが問題。移動、情報、理解の壁が孤立を生む。
⑦	メンタル不調	不安や抑うつにより、人に会うのがつらくなる外に出にくくなる。孤立→抑うつ→行動縮減→さらなる孤立という循環を生みやすい。孤立の原因にも、結果にもなる。
⑧	慢性疾患	長く続く病気や痛み。痛飲・体調不安が外出や交流を減らす。孤立すると、病気の管理も難しくなる。重症化リスクを高める。
⑨	認知機能低下	物忘れや判断力低下への不安。失敗体験を避けるため、人との関わりを控える。気づかれにくい孤立が進む。
⑩	仕事喪失	失業・引退・非正規化により、所得問題だけでなく、毎日のリズム人との関係を一度に失う。特に、男性高齢者・中高年単身層で孤立が進みやすい。
⑪	デジタル孤立	スマホやネットが使えない、使いにくい。情報・制度・人につなげられない。高齢者だけでなく、困窮層や障がい者にも広がる。
⑫	つながり	つながりは「目的」ではない。困りごとが深刻になるのを防ぐ土台である。医療・福祉・支援は、つながりがあって初めて届く。回復と予防の鍵。

Copyright © SHIBAHARA Yasunori (Japan Association for Professionals' Activities) All Rights Reserved.

【社会的孤立・孤独に係わる事象の流れ】

社会的孤立・孤独の根源的原因は、社会構造・生活環境の変化により、個人が想定していたあるいは期待していたライフコースからのズレが生じることにある。性格や努力不足の問題ではない。これが社会課題とされる所以である。そして、各種の心身的不安・不調が起こり、人の

つながり意欲が減退し、行動が抑制され、孤立・孤独感が生まれ、様々な関連する「困りごと」が発生する。このような流れの一例が「図表 社会的孤立・孤独の発生の流れの例」である。



因みに、上記図表の最後に記載されている事象について、「孤独死保険の保険金支払データを統計化し、賃貸住居内における孤独死の実像を統計データで示した」直近の資料として、「第10回 孤独死現状レポート 2025年12月 日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会」がある。保険金支払に伴う情報から見てくる全世代の社会課題としてのシビアな実態が見えてくる。

【参考】第10回 孤独死現状レポートによる分析結果<抜粋>

- 本レポートにおける孤独死の割合は男性 83.3%、女性 16.7%。
 - 孤独死亡時の平均年齢は男性 63.7 歳、女性 62.9 歳。平均寿命と比較すると、若くして死を迎えている状況は第1回レポートより変わっていない。
 - 65歳未満のいわゆる現役世代の孤独死者が 46.1%となっており、「孤独死は高齢者だけの問題」ではないことが判る。死亡原因別の人数は、病死が大半を占める。
 - 本レポート統計開始以来、孤独死における若年・壮年層の自殺割合が高い傾向にある。
 - 特に、女性においては 20代～40代の層の自殺割合が 76.3%と高い傾向にある。また、女性の 20代の自殺割合は、35.3%と全年齢層の中で突出して高い状況にある。
- ※本レポートは賃貸住宅入居者に関する分析であり、持家居住者等は含まれていない。

補：本解説の参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>

4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独・社会システム

[時代環境]

- ▼2026/01/28 「失敗しない消費」志向になった日本人 Japan Innovation Review powered by JBpress <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/92959>
- ▼2026/01/23 特集：イノベーション RIETI Highlight Vol.107 (2026年冬号) 経済産業研究所 <http://www3.keizaireport.com/report.php/RID/652604/>
- ▼2026/01/19 起業の常識が変わる——事業企画から改善まで、AI 主導の「スタートアップ新時代」目前に迫る | Forbes JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/89299>
- ▼2026/01/16 企業の新陳代謝と日本の生産性 起業・成長・廃業の段階別支援が生産性向上の鍵 <https://www.mizuho-rt.co.jp/business/research/report/pdf/insight-jp260116.pdf>

[地方創生・日本創生]

- ▼2026/01/28 縮減社会の空間管理と一極集中・地方創生 内海麻利 地方自治総合研究所 <https://jichisoken.jp/file/monthly/202602/muchiumi2602.pdf>
- ▼2026/01/26 農地の承継～資産承継の観点から農地の価値およびその承継・活用を考える 野村證券 <http://www3.keizaireport.com/report.php/RID/652894/>
- ▼2026/01/15 インフラの危機：水災害と交通流の変化 東京大学大学院 教授 羽藤英二 https://www.jice.or.jp/cms/kokudo/pdf/tech/reports/48/jicereport_no48_02-1.pdf
- ▼2026/01/09 利用者が乗降地点を選べる公共ライドシェア実証、徳島県海陽町 新・公民連携最前線 <https://share.google/4zg2CEyQUcBbce6DB>

[COVID-19]

- ▼2025/01/14 新型コロナ死者 15・8 万人 高齢中心に高水準、初確認 6 年 東京新聞 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/462003>
- ▼2026/01/13 2025 年「ゼロゼロ融資」利用後倒産 433 件 増減を繰り返しながらも月間 30 件台を持続 東京商工リサーチ https://www.tsr-net.co.jp/data/detail/1202298_1527.html

[社会的孤立・孤独・ひきこもり]

- ▼2026/01/29 AI の役割は人と人をつなげる橋渡し 信州大学/AI メンタルヘルスケア協会 高橋 史 <https://www.works-i.com/research/project/family/seeker/detail003.html>
- ▼2026/01/27 過度のひとり時間は 10 代の脳の発達に悪影響、専門家が警鐘 ナショナル ジオグラフィック https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/26/012300051/?ST=m_news
- ▼2026/01/22 思春期に孤独感が持続すると精神症・抑うつ・不安・幸福度低下につながることを確認 国立精神・神経医療研究センター <https://tinyurl.com/2c248kh4>

[社会システム]

- ▼2026/01/28 地政学リスクに揺れる時代、リーダーにとって「先見の明」は最も価値ある能力に Forbes JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/90265>
- ▼2026/01/26 思決定と判断における思考過程と認知メカニズム ファイナンス 2026 Jan 財務省 https://www.mof.go.jp/public_relations/finance/202601/202601l.pdf
- ▼2026/01/11 政治家の短期主義を抑制する制度設計：学術的知見と日本への提言 Education Policy Actavista https://note.com/epolicy_actvst/n/n60dd8b210f4f

※特定テーマ・分野に係る情報のキュレーションの要望があればご連絡ください。

5. 読者の声

[読者の声] 第二の人生 生涯現役で行く その9 (作詞・作曲家 高橋育郎)

軽井沢田崎広助美術館音楽祭「真夏の夜の夢」コンサートに出演。

平成8年8月上旬のこと。日本芸術協会副総裁に転出した栗原氏の斡旋によるもので、コンサート前夜、私は栗原氏ご夫妻と軽井沢へ出かけた。

美術館は中軽井沢駅下車。改札を出ると、正面の壁にコンサートの案内ポスターが掲出されていて、私の名があった。

館長が出迎えてくれて、昼時で駅前の蕎麦屋に立ち寄った。本場信州そばの美味しかったこと。その夜は田崎氏の別荘に泊まった。田崎広助画伯は文化勲章受章者だ。別荘にはピアノがあって、午前中は練習。午後の本番に備えた。出演は弦楽四重奏の演奏家が、先ずは演奏し、続いて私の登板となった。司会は栗原氏だ。そして、プログラムに沿ってすすんだ。会場は100人ほどで満員だった。

客席には私の歌の会のピアノ伴奏者、野沢さんの姿があり、その隣に風貌のよい中年の男性が、熱心に私を注視していた。コンサートが終わるや、その男性は急ぎ私の元へ寄ってきて、参議院議員の野沢と名乗った。私は驚き館長に告げた。館長は「それでは、これから庭に出て、パーティーをやるから、乾杯の音頭をとってもらいましょう」といった。

白樺に囲われた庭に出ると、満天の星が瞬いていた。

野沢氏の挨拶は「いま、あちらで長野新幹線の工事が進んでいます。私はその工事の建設委員長をしています」といった。それで思い出した。あの自由が丘で、セミナーが終わっての帰り道で野沢さんが「うちの主人は元国鉄で施設畑です」と言っていたことだった。野沢氏は、その後参議院議長になり、小泉内閣の法務大臣になられた。自由が丘の帰り道、野沢さんがおっしゃったことが、ここで判明した。

「真夏の夜の夢」コンサートは、翌年の夏にも行われた。その時は家内が友達を誘い、3人で行った。

田崎さんは、私と栗原氏を軽井沢のスケッチ旅行に招いてくれて、浅間山をスケッチした。また別の日には、富士五湖巡りを案内してくれた。

しかし、田崎さんは大の酒好きで、酒が祟って、その翌年の春に亡くなられた。息子さんが後を継いだけどコンサートはやらなかった。

「歌のおばさん安西愛子の良歌保存会」に入会

安西愛子は、私が中学・高校時代NHKの歌のおばさんとして、松田トシの二人で活躍していた。その安西愛子良歌保存会に栗原氏が私を斡旋してくれて入会した。安西先生の事務所は御茶ノ水駅の近く、神保町方面通りにあった。そして、この事務所で保存会の会員が打ち合わせを行った。平成8年の先ずは4月に新宿安田生命ホールにて歌った。テレビで活躍中のオペラ歌手・二期会の秋山恵美子や安田伸が出演した。そして、10月には駒場エミナースに出た。伴奏はいずれも栗原さん。その10月は栗原さんと二人が実行委員に任命され、駒場エミナースのステージを下見したのだった。

10月の役員会で、誰かが川田正子さんと呼んでくれないかといった。そこで私は、すかさず

「それでは、私が呼びましょう」といって、川田さんに電話すると「安西先生の会ならば、喜んで出ます」といった。そして今回も出演者の写真入りプログラムが作られた。駒場での本番は私の後が川田さんで、私は4曲歌ったが、中で「平城山（ならやま）」は、大向こうから「ブラボー」の声がかかり、司会者が「高橋さんは、元国鉄の変わり者」と紹介し、幕が下りると、飛んできて「変わり種というところ間違いました」といった。駒場といえば、「歌の会」のメンバーに、元NHK解説委員長の成田さんがおられ、このエピソードを話したところ、自分は駒場に住んでいるが、現在エミナーズは廃止になった旨はなされ、またNHKの「あなたのメロディー」で、旗照夫が「機関士一代」を歌ったことを話すと、旗照夫の後援会長をやったことがあると言った。当委員長とは、いまもご交誼が続いている。ところで安西先生は、そのあと病で倒れ、保存会は中止になった。

「ああ浦頭」に作曲

平成8年のこと。横浜市生涯現役かなざわ会の代表、門口さんを訪ねた。当時、私はLVC発行の月刊誌の編集を担当していて「生涯現役で活躍している人」の欄に、門口さんを記事にするため取材した折、「高橋さん。佐世保市の方が、どなたか『ああ浦頭』に作曲してくれる人はいないか尋ねられているけど、いかがでしょう」と言われ「では、やってみましょう。ところで浦頭ってなんですか」と問うたところ、「佐世保湾にある港のことで、戦後大陸から引揚げ船が入港した港のことですよ」と言われ、「そうですか」というと「これが、その詩ですよ」と歌詞を示し手渡した。引き揚げと言えは戦後、父がタイから浦賀港に引き揚げたので、その思い出が、こみ上げた。窓からは夕日が差し込み、情感が溢れる中、ピアノに向かった。作詞者は県立長崎大学英文科の教授、ペンネーム山田十字、本名・宇座徳光先生だった。

五線紙にしたための譜面を門口氏に送ったところ、教授に渡り感謝の返事がきて、以後教授と電話で話あうようになった。教授の奥方が、地元でママさんコーラス「サークルうたごえ」をやっていて、発表会で発表したところ、評判がよく、佐世保市引揚げ記念平和公園で引揚50周年記念として大々的に発表会を行った。ほかに二団体が加わった。そして市長も高らかに平和を訴える講演をした。市長自らが引揚げ船で浦頭港に到着したとの事で、その時の感激を声高に語った。そこでは地元の踊り手、日本舞踊やフォーク・ダンスクラブなどが振り付けして踊った。それが長崎テレビで報じられ、DVDに記録され、地元の篤志家が私に送ってくれた。更に月刊「浪漫タイムス」も送ってくれて、そこには「ああ浦頭」の特集記事があった。

ところで、私は当日招待されていたのだ。しかし、雨が降らず水飢饉に見舞われ、給水車に予算がかかり、私の出張旅費が出せなくなったと市役所から電話が来た。

それはそれとして、話は思いがけなくも発展して、ハウステンボスにて、JTB主催「思い出の地 引揚港・佐世保（浦頭）を偲ぶ全国の集い」（終戦52周年記念）が行われ、実際に引揚げ船を佐世保湾に就航させ、引揚者が浦頭港に上陸するところが再現され、海上自衛隊ブラスバンドが「里の秋」と「ああ浦頭」を演奏した。会場では当時の写真展もあって、引揚者たちは、お互い思い出を語っていた。

式典は荘厳な雰囲気で行われ、地元の歌手・幸地愛子さんが「ああ浦頭」を独唱した。この模様は地元テレビ局が中継したほか、NHKが取材し、ドキュメント風にアレンジして放送し、私は自宅のテレビでみた。

そのすぐあと宇座先生は、病で実家の沖縄に帰られた。私に沖縄に遊びに来るよう誘われたが、間もなく残念ながら亡くなられた。

長崎放送では「バッテン長崎・歌の街」という番組で、この歌が出来た経緯など放送し、そのCDも頂いた。長崎は、ご当地ソングが多く「ああ浦頭」はベスト 50 の中に選ばれた。その選定は長崎グラバー邸で行われた。 (続く)

6. 連携団体及び Japa からのご案内

▼ 連携団体の(一社)レジリエンス協会主催「2026年2月学生発表会」のご案内

- ・ テーマ：レジリエンスの未来を担う
- ・ 開催日時：2026年2月6日(金) 13:00-16:30
- ・ 開催形態：ハイブリッド
- ・ 参加費：無料 ※会員以外の方の参加も大歓迎
- ・ 詳細及び参加申込：Peatix 経由申込 <https://rrcj-japan-20260206.peatix.com/>
直接申込み <https://resilience-japan.org/contact>

▼ Japa Newsletter 掲載写真の募集

Japa Newsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真(著作権所有/フリー)がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter 編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員(個人)と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japa は、随時、会員[正会員、一般会員]を随時募集しています。

申込みをお待ちしています。

入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

7. つぶやき(編集後記に代えて)

寒波が押し寄せる中、1月27日、第51回衆議院銀選挙が公示され、投票日が2月8日となった。全国の基礎自治体の職員の方々は、その準備・対応に大変であろうことが十分推察される。この選挙次第で、日本の行く末が見えてくる。グローバルリスクが変質するなか、多くの選挙民の参加による国民の意思が反映されることを期待したい。前回投票率 53.85%を超えて、せめて、60%台には行って欲しい。オールドメディア・SNS等のメディアの伝える責任も重い。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp